

1. 下水道管路マネジメントに関する技術基準等の考え方

- 現行の基準等を包括的に見直し、重要な項目は国の基準等に引き上げ
- 社会的影響を踏まえ「重要管路」と「枝線」に区分し、「メリハリ」をつけた戦略的なマネジメントを進め、限られた人員や予算の中で施設の安全性を確保

2. 点検・調査・診断に関する基準等

(1) 診断区分の見直し・構造に応じた診断基準

- 箇所毎に健全度を評価するとともに、明確な診断が難しい状態の区分を設置
- 鉄筋コンクリート管の診断基準を見直すとともに、シールド管の診断基準を提示

(2) 「メリハリ」をつけた点検・調査

- 「重要管路」は、頻度を明確化、方法を高度化し、健全度Ⅲ箇所は更に高頻度化
- 「枝線」は、要注意箇所の頻度を明確化し、それ以外は適切な頻度でスクリーニング等に基づき監視

(3) 診断の質の確保

- 必要な知識や技能を有する者が診断することとし、技術者の能力向上を促進

3. 構造に関する基準等

(1) リダンダンシー(多重性)の確保

- 災害・事故時の機能確保等のため、「重要管路」の水位を下げるできない箇所、複線化等による多重化を原則化

(2) メンテナビリティ(維持管理の容易性)の確保・向上

- 維持管理の容易性等を確保・向上させるため、改築の機会を捉え、マンホールの間隔や構造等を見直すことを原則化

(3) 要注意箇所への対策

- 新技術の活用を含め対策の実施を強化

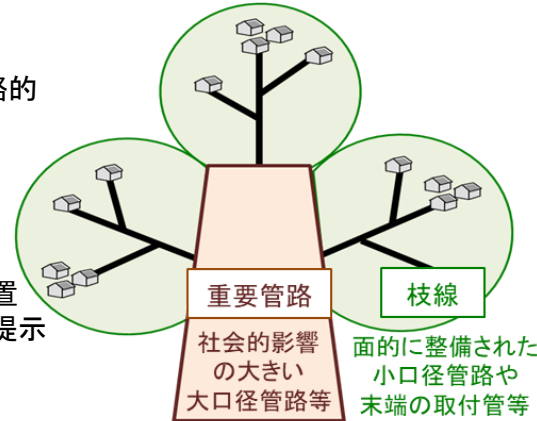
4. 2つの「見える化」に向けた情報管理

- 維持管理の正確性や効率性の向上に向け、記録すべき情報を見直し、デジタル化を促進
- 市民の使用料負担等への理解促進に向け、老朽化状況や対策内容等の公表を推進

5. 管内作業の安全性確保

- 安全確保が何よりも優先されるという基本スタンスを再確認し、留意事項を徹底
- 点検・調査技術の高度化・実用化を推進

「重要管路」と「枝線」の考え方



「メリハリ」をつけた点検・調査

| 点検調査 | 重要管路 | | 枝線 | |
|------|---------------|------------------|--|--------------------|
| 頻度 | 要注意箇所 | 5年や(更に短い)●年に1回以上 | 要注意箇所 | 5年に1回以上 |
| | 要注意箇所以外 | 10年に1回以上 | | |
| | 健全度Ⅲと診断された箇所 | 上記より更に高頻度化 | 要注意箇所以外 | リスク評価等に基づき適切に頻度を設定 |
| 方法 | 複数手法を組み合わせ高度化 | | スクリーニング等に基づく監視 末端の取付管等は、 時間計画保全や事後保全の考え方も 参考に効率的に更新 | |

診断区分の見直し(案)

| 健全度区分 | | 状態 |
|-------|--------|--|
| Ⅳ | 緊急措置段階 | 構造物の安全性が低下する、又は低下する可能性が著しく高く、緊急に改築等の措置を講ずべき状態 |
| Ⅲ | 早期措置段階 | 構造物の安全性が低下する可能性があり、早期に改築等の措置を講ずべき状態 |
| Ⅱ | 要監視段階 | 構造物の安全性が低下していないが、異状の進行等を監視する必要がある、措置を講ずることが望ましい状態 |
| Ⅰ | 健全 | 構造物の安全性が低下していない状態 |
| 診断保留 | | 十分な調査ができない等、明確な診断が難しい状態 ※ 巡視や路面下空洞調査等、個別に対応方法を検討・実施 |

リダンダンシー確保の取組例

